

2020年8月16日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

申命記 32 : 3～6

ルカによる福音書 9 : 37～45

「イエスさまの我慢」

<山上の変貌のあと>

イエスという方は何者か。ルカによる福音書が問い続けてきたことです。そして、その答えもまた示されてきました。イエスさまは、神の御子。神さまが遣わされた救い主。

前回の聖書箇所では、三人の弟子を連れて山に登り、祈っておられたイエスさまが栄光に輝いた、ということが語られていました。それは、イエスさまが十字架の苦難を経て、復活の栄光に与られることの約束、そしてイエスさまこそ、神のまことの独り子であることを示すものでした。

<山の麓での出来事>

さて、今日の箇所は、その翌日の出来事です。イエスさまと三人の弟子たちが山を下りてくるところから始まります。

山の麓には、三人以外の他の弟子たちと、大勢の群衆が待ち受けていました。そして、ある一人の男が、山を下りてきたイエスさまに向かって、大声で願ったのです。

「先生、どうかわたしの子を見てやってください。一人息子です。悪霊が取りつくとき、この子は突然叫びだします。悪霊はこの子にけいれんを起こさせて泡を吹かせ、さんざん苦しめて、なかなか離れません。この霊を追い出してくださるようにお弟子たちに頼みましたが、できませんでした。」

どうやら、イエスさまと三人の弟子たちが山へ登っている間、他の弟子たちのところへ、悪霊に悩まされている一人息子を連れて、この父親がやってきたようです。

イエスさまの教えや奇跡の御業は、多くの人々に知れ渡るようになっていました。弟子たちも、イエスさまから力を授けられて、町や村に遣わされ、神の国を教え、人々の病をいやしてきました。そのことは、9章1～6節に語られていました。

それで父親は、イエスさまの弟子たちに、一人息子を苦しめる悪霊を追い出して下さい、病をいやして下さい、と頼みに来たのです。わざわざ「一人息子」と書かれています。大切な、たった一人の我が子が、酷い苦しみの中にある。そのことによる父親の悲しみ、悩みが引き立たせられます。

それを受けて弟子たちは、どれ、悪霊を追い出してあげよう、病をいやしてあげよう、と言って、やってみようとなりました。ところが、全く何も出来なかった。それで父親は、弟子たちの師匠であるイエスさまに願ったのです。

<信仰のない、よこしまな時代>

さて、どうして弟子たちは、以前、イエスさまに町や村に遣わされた時は、病をいやすことが出来たのに、今回は一人息子をいやすことが出来なかったのでしょうか。

それは、イエスさまの御言葉を聞くと分かります。イエスさまは弟子たちのこのような有様を聞いて、こう言われました。「なんと信仰のない、よこしまな時代なのか。いつまでわたしは、あなたがたと共にいて、あなたがたに我慢しなければならないのか。」

「信仰のない、よこしまな時代」とは、ただその時代が悪い、世の中が悪い、ということではありません。イエスさまの弟子たちが、不信仰で、よこしまだ、と仰っているのです。

同じ出来事がマルコ福音書、マタイ福音書にも書かれていますが、そこでイエスさまはもう少し詳しく弟子たちが一人息子をいやすえなかった理由を仰っています。

マルコでは「この種のもの、祈りによらなければ決して追い出すことはできないのだ。」(マルコ 9:29)と言われました。マタイでは、「信仰が薄いからだ。はっきり言うておく。もし、からし種一粒ほどの信仰があれば、この山に向かって『ここから、あそこに移れ』と命じて、その通りになる。あなたがたにできないことは何もない。」(マタイ 17:20)と言われました。

つまり、弟子たちはこの一人息子を癒そうとする時、祈ることをしなかった。そして、信仰がない、つまり、神さまの力を信じて頼ることをしなかった、ということなのです。

9章1節以下で、弟子たちがイエスさまに遣わされた時、弟子たちはイエスさまから「あらゆる悪霊に打ち勝ち、病気をいやす力と権能を」授けられました。そして、「何も持って行ってはならない。」と命じられました。つまり、自分の持っているもの、自分の力や能力などに一切頼らず、イエスさまから与えられた力にのみ、神の力にのみ依り頼みなさい、と命じられたのです。

そして、この時の弟子たちは、イエスさまから与えられた力と権能によって、イエスさまの御言葉に頼り、神の力を信じて、祈り求めて、人々に御言葉を宣べ伝え、人々の病をいやすことが出来たのです。

しかし、今回はそうではなかったということです。もしかすると、イエスさまから与えられた力や権能を、いつの間にか自分のもののように錯覚したのかも知れません。神さまの力によって行なったことを、自分が行なったことのように感じ始めていたのかも知れません。

「一人息子から悪霊を追い出して欲しい。病をいやすして欲しい」と頼まれ、「どれ、わたしがいやしてあげよう。以前も出来たのだから、今回も出来るだろう。」そう言って、神さまに頼らず、祈らず、自分で何とかしようとした。そして、その結果、何をすることも出来なかったのです。

それをイエスさまは「なんと信仰のない、よこしまな時代なのか」と言われました。これは、今日読まれた申命記 32章5節の「不正を好む曲がった世代」という言葉が意識されて

います。人々が曲がってしまっている。神さまに従うことをやめ、心が曲がって、神さま、イエスさまの方を向いていない、ということです。

イエスさまは、これまで弟子たちに、神さまのご計画を教え、ご自分が救い主であることを示し、憐れんで下さる神にのみ頼るように、神のなさることを受け入れるように、自分を捨てて、神の御心に従って歩むように、と教えてこられました。しかし弟子たちは、すぐに神さまに向かうべき心の方向が曲がってしまい、自分を見つめ、祈ることを忘れ、神さまに信頼して頼ることを忘れてしまうのです。

<イエスさまの我慢>

イエスさまは言われます。「いつまでわたしは、あなたがたと共にいて、あなたがたに我慢しなければならないのか。」

「共にいる」ということは当然、一緒にどこかへ行く時は、同じ方向を向き、同じ道を歩いていくものです。イエスさまは、弟子たちと共にいて、彼らに寄り添って、神さまの望まれる道へ、神さまのご計画される救いの道へ導き、共に歩んで行こうとして下さっています。

それなのに弟子たちは、神さまを信頼せず、イエスさまの心を理解せず、曲がってあちこちへ歩いていく。ここに、イエスさまの大変な忍耐があるのです。イエスさまは、弟子たちのために、大変な我慢をなさっているのです。

そして、これは弟子たちだけでなく、わたしたちもまたイエスさまに大変な忍耐を強いているのではないのでしょうか。共にいて下さるイエスさまの御心を思わず、自分の思いに従って道を歩こうとし、心から神さまを信頼せず、自分の力に頼ってはつまずいている。そんな曲がった歩みをして、イエスさまを苦しめているのではないのでしょうか。

イエスさまは、ご自分がメシアとして、人々の救いのために歩まれる道を、9章22節でこのように語っておられました。「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている。」

「人の子は必ず多くの苦しみを受ける。」それは、イエスさまに今敵対し、攻撃してくる人々のことだけでなく、弟子たち、そしてわたしたちもまた、神さまの力に信頼しない、曲がった心によって、イエスさまに多くの苦しみを与えている者なのです。わたしたちこそ、イエスさまに重荷を負わせ、苦しめている者なのです。

<いつまで…十字架に至るまで>

そんなわたしたちに、イエスさまは言われます。「いつまでわたしは、あなたがたと共にいて、あなたがたに我慢しなければならないのか。」

しかし、イエスさまのこの言葉は、弟子たち、わたしたちに愛想を尽かして、苛立ちいっぱい、「いい加減にしろ。もう堪忍袋の緒も切れるぞ。お前たちは、いつまでたっても、どうしようもない奴らだ。もう我慢も限界だ。これ以上一緒にはいられない」と、そんな意味で言われたものではありません。

それは、この後のイエスさまのなさったことと、御言葉によって分かります。

まずイエスさまがなさったこと。それは、この一人息子と父親を憐れんで下さったということです。イエスさまは、父親に「あなたの息子を連れてきなさい」と言われ、その子に取りついた汚れた霊を叱り、息子をいやして、父親に返して下さいました。

そして、人々はここで、「神の偉大さに心を打たれた」とあります。人々は、イエスさまがなさったことを、イコール神の偉大さ、と受け止めました。神の御子であるイエスさまの思い、行いは、父なる神さまの思い、行ないと一体です。イエスさまはここで、苦しんでいる者に目を留め、癒して下さる、父なる神さまの深い憐れみの御心と、神の偉大さ、御力を、多くの人々の目に現わして下さいました。

そして、イエスさまの御言葉です。イエスさまは人々がその神の御業に驚く中、弟子たちに第二回目のご自分の受難の予告をされました。44 節「この言葉をよく耳に入れておきなさい。人の子は人々の手に引き渡されようとしている。」

「人々の手に引き渡される」とは、十字架の苦難と死を現わしています。つまり、イエスさまは、愛想を尽かして、弟子たちに、もうあなたたちには我慢できない、もう一緒にはいられない、と言われたのではなかったのです。人々を深く憐れんで下さるイエスさまは、弟子たち、わたしたちに愛想を尽かすどころか、人々の手に引き渡されるまで、ご自分の十字架の死に至るまで、共に歩んで下さる。共にいて下さる。我慢して下さい、というのです。

「いつまであなたがたと共にいられるだろうか。いつまであなたがたに我慢しなければならないのか。」イエスさまは、そのことの答えを、憐れみの御心による一人息子のいやしと、ご自分の受難を予告する御言葉によって示されたのです。

実は、ここに使われている「我慢」という言葉のギリシア語は、旧約聖書で「背負う」という意味でも用いられています（イザヤ書 46：4）。イエスさまは、心が曲がった弟子たちを、また神さまに信頼せず、御心に従わない、心が曲がったわたしたちを、深く憐れんで下さり、我慢して、耐え忍んで背負って下さり、最期まで、いつまでも、共に歩んで下さるのです。

いつまでわたしは、あなたがたと共にいられるだろうか。いつまでわたしは、あなたがたに我慢しようか。それは、いつまでもだ。最期までだ。十字架の死に至るまで。すべてを成し遂げるまで。あなたの罪が赦され、あなたが新しい命に与るまで、わたしはあなたたちと共にいよう。わたしはあなたたちを、弱さも罪も死も、丸ごと背負って、いつまでも共にいよう。これが、イエスさまのお答えなのです。

<御心を知る時>

さて、45 節には、「弟子たちはその言葉が分からなかった。彼らには理解できないように

隠されていたのである。彼らは、怖くてその言葉について尋ねられなかった。」とあります。

この時、弟子たちはイエスさまが仰る言葉を、理解することが出来ませんでした。心が曲がっているからです。神さまに信頼していないからです。自分の力に頼り、神さまの御心ではなく、自分の心を見つめているからです。

しかし、イエスさまは、このような弟子たちの罪をすべて背負って、十字架に架かられます。そして、神さまはイエスさまを死者の中から復活させ、イエスさまを信じるすべての者に、罪の赦しを得させて下さるのです。

弟子たちは、十字架で死に、復活し、救いを実現して下さったイエスさまと出会ってはじめて、イエスさまが語られた御言葉、旧約聖書から示された神さまのご計画、イエスさまが成し遂げて下さったことの意味が分かるのです。

イエスさまを裏切り、まったく従うことが出来なかった自分の弱さ。神さまに従わない、曲がってしまっていた心。どうしようもない深刻な罪。イエスさまは、そんなわたしを丸ごと背負っていて下さったのだ。イエスさまの苦しみ、イエスさまの我慢、イエスさまの十字架の死は、自分の罪のためであったのだ、ということです。

そして、罪の赦しを成し遂げて下さったイエスさまは、復活して下さり、また出会って下さった。全てを成し遂げて、まさに今、共にいて下さる。そして、これからも、いつまでも共にいて下さる、ということです。

わたしたちもそうです。自分を信じ、自分の力で救いを得ようとし、ジタバタしては深みにはまるわたしたちです。心が曲がり、御心に背き、共にいようとして下さるイエスさまを苦しめ、はかりしれない忍耐を強いているわたしたちです。

しかし、イエスさまは、あなたと共にいるために、十字架の苦しみを受けようと言って下さる。十字架の死に至るまで、あなたを背負っていこうと言って下さる。

そして、神さまは、わたしたちの罪の贖いを成し遂げて下さったイエスさまを復活させて下さり、わたしたちに罪の赦しと、永遠の命と、復活の約束を与えて下さるのです。まことに、いつまでも、イエスさまと共に、神さまと共に、生きる者として下さるのです。

わたしたちは、御言葉によって、十字架と復活のイエスさまとの出会いによって、このことを知らされます。神さまの憐れみの御心を、罪の赦しを知ります。

その時わたしたちは、しがみついているものを捨てて、自分自身を、罪も、弱さも、命も、すべてをイエスさまにすっかりお委ねして、この救い主に背負われつつ、心から祈って、心から信頼して、神さまに従い、礼拝する者になりたいのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

あなたは深い憐れみをもって、わたしたちの苦しみをいやすために、罪から救うために、御子であるイエスさまを遣わして下さいました。

イエスさまは、御心を成し遂げるために、心の曲がったわたしたちを我慢して下さい、十字架の死に至るまで苦しみを耐え忍び、最期までわたしたちを背負って下さいます。そうして、わたしたちを救い出し、いつまでも神と共に生きる者として下さいます。わたしたちのインマヌエル(神は我々と共におられる)の主でいて下さることを、心から感謝いたします。

罪を赦して頂いたわたしたちが、心をまっすぐあなたに向けて、あなたと共に、あなたの道を歩む者となる事が出来るように、聖霊によって導いて下さい。

また、一人でも多くのものが、わたしたちを担って下さるイエスさまを知り、この方に自分をすべてを委ね、あなたに信頼して、平安の内に生きる者となる事ができますように。

イエスさまの御名によって祈ります。アーメン